

〈北川透〉『あんかるわ』の未来からの埋葬(1)―北川透の〈誤読〉の深さ

北川透『あんかるわ』については、これまでその都度松下昇も村尾建吉も断片的に批判してきているが、『あんかるわ』に松下昇の論文やビラ等の表現が〈転載〉され、また村尾の「白夜通信」もある時期に〈転載〉されることによって、北川透『あんかるわ』がこれまでの誌面を大きく変容させながら、へへ闘争への共闘の姿勢をかたちづくるうとしてきたものの、限界を打破できずに松下への個人的な協力姿勢も維持しなくなり、『あんかるわ』の購読者数を激減させるなかで、友人の菅谷規矩雄の死に見舞われ、彼の埋葬と『あんかるわ』の埋葬とを打ち重ねるようにして『あんかるわ』を終刊させ、私学の大学教官の途を選択していった、以上の軌跡を〈総体〉的に批判する〈時期〉が、今回、村尾に訪れていると感じ取れるようになった。なぜ、〈いま〉なのか。その自問に対する自答の一つは、北川透『あんかるわ』をへへで括って、その批判のむこうに突き抜けるのではないか、と思えるようになったことである。それは自信というよりも、〈書くこと〉に対して多くの問題が見通せるようになったことと深く関連している。別の言いかたをすれば、北川透『あんかるわ』の座礁は、「書くこと」を超えて〈書くこと〉へと変換されていくなかでこそ、捉えられなければならないことに思い至るようになったということである。

北川透『あんかるわ』がへへ闘争からの本質的な問いに直撃されながら、視界不良による〈誤読〉の中で幻想的な闘いに一歩足を踏み出そうとしてきた唯一の雑誌であったことは間違いない。〈幻想〉概念の把握の決定的な〈誤読〉に閉ざされて、北川は文学・詩の旧秩序へと回帰していき、その枠組みから松下や村尾を非難する倒錯ぶりを後年晒しつづける(現在もその醜態はつづき、詩壇で長老詩人の健在ぶりとして受け入れられている)ことになったとしても、北川透『あんかるわ』の〈誤読〉と重なっていた村尾「白夜通信」の〈誤読〉を凝視するためにも、北川透『あんかるわ』の〈誤読〉が「書くこと」の決定的な限界として対象化されなければならないのである。

この作業には当然、これまで『あんかるわ』誌上や北川の著作で一方的に批判されながら、反論や見解の機会を一切与えられなかった松下昇の〈声〉も参加させていくが、村尾が刊行してきた『存在と言語』四巻に続く資料集の位相にあることも記しておく。

『現代詩文庫 91 菅谷規矩雄』(一九八七年十一月三十日発行)には、北川が菅谷との交渉について記した文章「修羅シユシユシユ、菅谷規矩雄との――交渉史一面」が収録されており、そこに松下昇とはじめての接触が取り上げられている。

《一九六五年八月、神戸、六甲山中の有馬温泉において開かれた、「日本読書新聞」のモニター会議の《集まりで何が話されたのか覚えていないが、わたしには忘れられない出会いがあった。こちらの眼を見つめて、一語一語嚙みしめるようにゆっくり話す不思議な人物。それは松下昇であった。彼は若い頃から、落ち着いた大人の風貌をしていて、わたしより一歳若いということが信じられなかった。わたしは彼がその当時、「試行」に発表していた小説を読み、ひそかに高く評価していたから、二人だけの話がはずんだのだと思う。自分のいま教えている神戸大学に、菅谷規矩雄が助手だか講師で来ており、住まいも近くだ、と言った。》

翌日、北川は松下に案内されて菅谷宅を訪問し、松下はそのまますぐ帰ったので、北川と菅谷は二人で「凶区」や「あんかるわ」の話をし、《これを直接のきっかけとして、二人との間に単に書かれたものを読むという関係を越えた交渉が生まれた。この延長においてこそ、松下さんは大学闘争が起るや、「情況への発言」を出発点とするビラを送ってきた。名古屋大学に移った菅谷さんは、バリケードのなかに、わたしを招いてくれた。彼らの熾烈なたたかい。わたしは同人組織を解体し、わたしの個人編集の雑誌とした「あんかるわ」を、彼らの闘争の表現のレベルでの媒体にした。そして、「あんかるわ」別号として、『松下昇表現集』（一九七一年一月）を刊行し、さらに、『菅谷規矩雄〈解体新書〉第一冊』（一九七四年一月）を刊行した。》

注目されるのは、次の箇所である。

《あのころの菅谷さんについて書くとなると、松下さんを含んだ奇妙な三角関係について触れないわけにはいかない。松下昇と菅谷規矩雄との間には、わたしにはよくわからない緊張関係があった。大学闘争について言えば、二人はそれぞれの拠点となるべき場所をもっていた。場所をもたないわたしは、大学闘争のレベルでは対応しない（できない）、表現にかかわるレベルでだけ関係すると公言しつつも、具体的な場所では、明快な区別がつけられないことも多く、いいかげんにならざるをえなかったし、いいかげんになることをむしろ積極的に肯定した。わたしへの対応で二人には、非常にはつきりした差違があった。松下さんは、わたしに対しても、次々と課題を提起し選択を強いた。むろん、わたしが拒否すれば、決裂にいたった最後の局面以外では、彼の考えを押しつけられたことはない。それに対して、菅谷氏は大学闘争に関して、わたしに何かの選択を強いること自体がいちどもなかった。彼は、どんなに学生たちと共闘する集団を組んでいても、わたしの見るところでは、いつも基本的に一人だった。

これを別の面から言うと、松下さんと会った時は、闘争の話題以外に、むろん、瑣末で取るに足りないような日常生活の話はいくらでもしたが、文学や思想情況の話はほとんどできなかった。彼は闘争の展開と孤立とともに、その面の関心やことばをますます失ってゆくように思われた。逆に菅谷さんとは、彼が闘争のどんな困難な局面にある時

でも、そんなことはまったく関係ないように文学や詩の話をしていた。二人とも、いわゆる政治家とは遠かったけれども、菅谷さんは大学闘争のなかにいても、すくなくともわたしとの関係では、詩人であり、文学の批評者である姿を失ったことはなかった。わたしと松下さん、わたしと菅谷さんというように、別々にはずい分会っていても、三人が一堂に寄り集ったのは、たった一回しかない。これはわたしにとって、いまでも不可解な驚くべきことである。》

菅谷との交渉について北川は延々と語りつづけているが、この緊張感の欠けた、弛緩した文章を再録した『菅谷規矩雄追悼集 1990・10』（松下昇気付 刊行委員会）の中で、刊行委は次の註を記している。（今後、刊行委の文章や註をここに再録や転載、引用する場合は、他と区別するために、「」の記号を使用する。）

「……北川の記事は、読者の印象を「一面」化させると判断した松下は、第一次の批判レジュメ（配布可能）を88年1月の批評集に関する討論集会で開示している。今回のパンフ刊行に際して、レジュメからのいくつかの項目を、いくらかの補充と共に掲載する。一四九ページ上段「松下昇と菅谷規矩雄との間には、わたしにはよくわからない緊張関係があった。」……各当事者から充分に開示されていないから無理もないが、北川の推測するような水準のものではない。基本的には①東京での六三年の出会い以来の質を帯びている。（安保闘争の潜り方、ブレヒトや東欧（暴動）の評価、詩の把握などに関する大衆的な討論過程において、私からかれへの〈批判〉を媒介して知り合ったという契機からの緊張感の存在したといえる。）②それぞれの出自や対的關係（特に、かれの結婚前後史）について、暗黙のうちに深く了解し合ってきた経過が、逆に語り合うことのタブーを作ったかも知れない。③菅谷は神戸大学へは私の一年後に私を追うようにして赴任したが、その後、非文学的？環境に絶望して名古屋大、さらに都立大へ移り、六九年秋の菅谷の授業拒否宣言まで数年間、私との交渉は殆どなく、その後、①へ螺旋状に一周する感触で密接な交渉が再開されるけれども、この時期以後に緊張感があるとすれば、情況の断崖を相互に離れた位置で無言の激励を伝え合いながら、じりじりと進んでいるという姿勢からきている。

以上で全てをつくしているとは思わないが、それでも北川の推測の仕方が、表面的で自分の感性の幅に無自覚に引き寄せ過ぎていることを示しているであろう。この傾向は全ての北川の記述に同程度に潜在していると考えてよい。

一四九ページ下段「（松下とは）逆に菅谷とは、闘争のどんな困難な局面にある時でも、文学や思想の話をしていた。」……私が「その面の関心やことばをますます失ってゆくように思われた。」時期に、私は「瑣末で取るに足りないような日常生活の話」を媒介して、かれらとテーマを共有し、既成の文学や思想を超える何かについて多くの発

見を語ろうとしていた。今も、より一層そうであると自負している。このことは、七〇年代の水準を持続しえている菅谷ならば、私以上に怒りをこめて肯定するにちがいない。

一五一ページの酒場やタクシーの場面は、修羅でも何でもない。文壇（詩壇）ゴツコの二番せんじ以下に過ぎない。六〇年六月には、喫茶店のテレビで闘争の中の死を見ている自分自身への凝視が、少なくとも菅谷を現場参加者と対等な表現者として支えていた。その時の感性は、どのように磨滅したのか。酔って、ホテルを予約しているという北川を無理にタクシーにひっぱり込んで、菅谷の住居への遠い距離を「何をしゃべったのか覚えていない」まま走る姿は、かれらが急速に文学的秩序（しかもレベルは六十年代以下の水準へ拡散しつつある。）へ復帰していく比喻のようで哀しい。」

ここには、「一五一ページの酒場やタクシーの場面」については掲載していないが、関心のある人や確認したい読者は、菅谷の詩集を直接手に取って読んでいただきたい。そうすれば、松下の註の的確さに驚き、震撼されるはずである。この北川の記事に対する松下以外の位置からの感想をいくつか列記してみる。

一、菅谷との交渉史の中で松下についても語らねばならなかったのであれば、二十数年後の時点に立つてではなく、交渉に〈問題〉がまだ起こっていなかった時点に立つて、松下についても語る必要があっただろう。そうであったなら、《同世代の詩や批評という点でみると、わたしはいちばん無意識のところ菅谷さんから、もっとも多くの影響を受けているはずである。》と記述するのと同じ度合いで、松下からも《同世代の詩や批評》を超えていく水準と方向において、《もっとも多くの影響を受けているはずである。》この点を抜きにして、その後の『あんかるわ』の変容は考えられないからだ。

二、《出会いというものは不思議だ。六甲の山の中で、思いがけず、松下さんと邂逅しなければ》、菅谷に会うこともなく、《わたしの人生のいくらかは確実に変っていた、と思う》という箇所は、何度読んでも《不思議だ》。なぜなら、《これを直接のきっかけとして、二人との間に単に書かれたものを読むという関係を越えた交渉が生まれ》、大学闘争の渦中の松下から「情況への発言」のビラ等が送られてきたり、名古屋大学に移った菅谷からバリケードの中に招かれて、「あんかるわ」の誌面はこれまでの号と大きく変化し、北川自身も南山大へ闘争にかかわっていくほどに《確実に変っていた》にもかかわらず、この文章を綴っている北川には、その痕跡がほとんど見えないからだ。情動的な出会いとしての意味を帯びていたにもかかわらず、単なる表面的な接触に還元したところで、《出会いというものは不思議だ。》と述懐していることの《不思議》さ。

三、《大学闘争について言えば、二人はそれぞれの拠点となるべき場所をもっていた。場所をもたないわたしは、大学闘争のレベルでは対応しない（できない）、表現にかか

わるレベルでだけ関係すると公言しつつも、(…)いいかげんにならざるをえなかったし、いいかげんになることをむしろ積極的に肯定した。」という箇所は、『大学闘争のレベル』と『表現にかかわるレベル』との『明快な区別がつけられない』ところで、北川は『いいかげん』であった以上に、彼が想定する『表現にかかわるレベル』においてこそ、なによりも『いいかげん』であった。幻想的な場所である大学で『表現にかかわるレベル』の闘争が展開されていたことがよくみえていなかったから、北川の幻想的な場所の水準では『明快な区別がつけられないことも多』かったのであろう。

大学闘争において松下と菅谷は、『それぞれの拠点となるべき場所をもっていた』のに対して、北川が自分は『場所をもたない』と言うとき、それはただか松下と菅谷は大学教官であったが、自分は大学教官ではない、という程度のことでしかなかった。松下と菅谷は大学教官であったから、『それぞれの拠点となるべき場所をもっていた』わけではない。同様に、北川が『場所をもたない』のは、彼が大学教官でなかったからではない。逆の問いかたを試してみる。もし松下と菅谷が大学教官でなかったなら、彼らは北川と同様に大学闘争に対して場所をもたなかっただろうか。そして北川が大学教官であったなら、大学闘争に対して『拠点となるべき場所をもっていた』だろうか。

松下は大学教官であったから、『六甲』『包囲』等の作品を書くことができて、『闘争を展開しえたのだろうか。菅谷もまた大学教官であったから、『国家』にむかつて詩を書くことができるか』という問いを発し、『詩人』大学教師たちよ、あなたが詩の領域にたちつづけようとするかぎり、『大学』闘争に口をつぐむな、そしらぬ顔してやりすぎそうとするな。『私』は無言のまま、『大学』闘争の場から、あなたの『詩』をみつめているのだから。』(以上、『飢えと美と(連載第四回)』——『あんかるわ No.24』と提起しえたのだろうか。北川が大学教官であったなら、詩人として彼らの問いや提起を全身で共有したのだろうか。

松下と菅谷は大学教官であったから、『大学』闘争を展開しえたのではない。大学の中で大学教官の枠組みに収まりえない問いと課題をふくらませていたからこそ、『大学』闘争を自分の場所において展開していくことになったのである。彼らは大学教官の仮装を必要としないところで、『それぞれの拠点となるべき場所』をつくりだしていた。だからこそ、学生たちの闘争に依拠することなく、自分たちにとっての『大学』闘争を六〇年安保闘争の敗北の(十)年間の最深处から捉え返し、突き出していくことになったのだ。大学教官ではないから自分が『場所をもたない』と考えている北川は、もし自分が大学教官であったなら、詩人』大学教師として大学闘争を回避することになるであろうことを、この箇所が無意識のうちに露呈していたといえる。詩人』大学教師は詩人』非大学教師と同質であった。だから『あんかるわ』終刊と同時に、詩人』大学教師として勤務することになる自分と衝突することもなかったし、葛藤することもなかったのだ。

四、菅谷が、《どんなに学生たちと共闘する集団を組んでいても、わたしの見るところでは、いつも基本的に一人だった》として、松下は菅谷以上に《いつも基本的に一人だった》《ことが見えていなかったなら、北川の目はなんと節穴であったことか。おそらく菅谷は真の共闘者を求めているところ、《いつも基本的に一人だった》》のに対して、松下は闘争過程で真の共闘者を見出そうとするところで、《いつも基本的に一人だった》。だから、《菅谷氏は大学闘争に関して、わたしに何かの選択を強いること自体がいちどもなかった》のに対して、《松下さんは、わたしに対しても、次々と課題を提起し選択を強いた。》のである。その態度の決定的な違いを北川は当時見通すことができなかったし、二十年後もできていないのだ。

その根本的な態度の違いについて推測すれば、菅谷が断言しようとする「拒否する思想の永続的現在」は闘争の永続化を意味していなかった。というより、「拒否する思想の永続」性は彼の脳裡にあっても、永続的な闘争は脳裡になかった。闘争の永続化など彼のモチーフにはなかったのではないか。だが松下は掛け値なしに永続闘争を志向していた。永続化しえないような闘争に自分の全存在が賭けられるはずがないことを、確信していたにちがいはなかった。その違いは、大学闘争の中での同じ意味をもつようにみえる労働拒否宣言において明らかだった。

松下の《情況への発言》は、「〈神戸大学教養部〉の全ての構成員諸君」への呼びかけを仮装していた。神戸大学教養部が《〜》で括られることによって、無数の任意の場所に置き換えて把握することが要請されており、寮問題やしけんという言葉にも《〜》が付けられることによって、それぞれの場所における問題や、無数の「しけん」であることが示唆されている。そして決定的に重要なことは、「旧大学秩序の維持に役立つ一切の労働（授業、しけん等）を放棄する」私に《〜》が付けられていることである。労働を放棄するのはすべての私の中の私であり、すべての私の中の別の私であるあなたも、以降に労働放棄を行っていかざるをえなくなることを前提として、すべての私の中の最初の私として労働を放棄していく、と宣言されているのだ。つまり、すべての私による労働放棄宣言が条件とされていることによって、神戸大学教養部以外のすべての者にむかって、「この問題提起に何らかの共有性を発見する諸君は、自己にとって最も必然的な方向を創り出して闘争に参加せよ。」と呼びかけられていたのである。

そんな位相にある松下の《情況への発言》と対比すると、菅谷の「授業再開拒否」は、あくまでも都立大における「授業再開拒否」であって、都立大以外のところでの「授業再開拒否」ではありえないことが明確になってくる。それは、宣言の冒頭から、「わたしがひとりの文学者として大学内に存在することの根拠は、あらゆる体制的権力にたいする批判、抵抗をラディカルに表現しつづけること以外にありえない。」と規定しているところにみられ、したがって、「解放学校の創設にむかって結集せよ。」と呼びかけて

いても、その対象は都立大の関係者に限定されており、その限定は菅谷が自分を大学内に存在する「文学者」として限定することとちょうど見合っていた。

菅谷の提唱する「解放学校」に外部からの参加者があったのかどうかは知らないが、松下を媒介するへく闘争には村尾を含む外部からの参加者は無数に存在した。それは、松下における闘争展開の仕方が関係性を問うていく、巻き込み型の流れをかたちづけていったことにかかわっており、菅谷の場合はおそらく巻き込んでいくことに積極的ではなかったことの違いとしてもあらわれていたのではないか。松下が北川に対して《次々と課題を提起し選択を強いた》のに対して、菅谷が北川に対して《何かの選択を強いること自体がいちどもなかった》のは、その違いからすれば、当然であった。松下からすれば北川も「神戸大学教養部」の全ての構成員諸君」の一人であったが、菅谷にとって北川は「解放学校」への参加者とはみなされていなかったであろう。大学を舞台にする闘争から法廷を含むさまざまな領域での闘争を模索しながら、永続闘争を追求する松下と、大学を舞台にする闘争についてしか考えようとしなかった菅谷との決定的な違いであった。「ひとりの文学者として大学内に存在すること」ができなくなれば、菅谷の「授業再開拒否」はもはやどんな根拠ももつことができなくなるのである。

五、北川は松下とは《文学や思想情況の話はほとんどできなかった》が、菅谷とは《闘争のどんな困難な局面にある時でも、そんなことはまったく関係ないように文学や詩の話をしていた》というその違いについて考えようとはせず、《菅谷さんは大学闘争のなかにいても、すくなくともわたしとの関係では、詩人であり、文学の批評者である姿を失ったことはなかった》と記しているように、北川にとってそのような菅谷との関係は好ましいものとみなされている。だからこそ、情況的には関係の欠損を膨らませていた。松下は大学闘争について語り合えるのと同じ度合いでしか、北川と文学や思想情況の話についても語り合うことはできないと考えていた。《大学》闘争のテーマとして文学や思想情況について論じ合うことができるなら、松下は北川といくらでも論じ合ったにちがいない。

松下は《大学》闘争を追求するなかで、文学や思想情況について真正面から取り組んでいたのである。大学闘争とは別のところに文学や思想情況はあると考えている北川には、そんな松下の取り組みは見えなかった。北川には松下は《闘争の展開と孤立とともに、その面の関心やことばをますます失ってゆくように思われた》としか、一貫して見えていなかった。北川が語る文学や思想情況を転倒する方向で、松下が文学や思想情況についての闘争を展開しているのに、そんな北川と松下との間で、《文学や思想情況の話》についてのどんな対話が成り立つだろう。松下が《闘争の展開と孤立とともに、その面の関心やことばをますます失ってゆくように思われた》としても、北川のその見方とは逆に、松下は本当は《その面の関心やことばをますます》先鋭化させていったと捉

えられる。

ところが、松下とはできなかった《文学や思想情況の話》を、北川が菅谷とならできなかったということは、菅谷が北川と同じ水準に立っていたということにほかならない。このことは、「ひとりの文学者として大学内に存在することの根拠」を問いつづけて、「授業再開拒否」に踏みだしていた菅谷は、北川に対して自分がかかえこんでいる自問を差し向けなかったことを意味している。要するに、松下は北川の水準には付き合わなかったが、菅谷は北川の水準に付き合うことができたのだ。つまり、松下は北川を友人としてよりも、共闘者の位相で接しようとしていたが、菅谷は北川がそう望んでいたように、友人として接しようとしていたのである。そのような友人関係が菅谷をアルコール中毒死へと追いやり、北川を大学教師の職へと向かわせていったのではないか。

六、《わたしと松下さん、わたしと菅谷さんというように、別々にはずい分会っていても、三人が一堂に寄り集ったのは、たった一回しかない。これはわたしにとって、いまでも不可解な驚くべきことである。》と北川が記す無邪気さは、思考停止に包まれている。菅谷とも北川とも情況的にしか会おうとしなかった松下の基本的な姿勢は、菅谷や北川だけでなく、誰に対しても貫かれていたようにみられる。それは、松下と会ったことのある者なら誰もが気づくことであり、当時の北川にはそのような緊張関係も感じ取れなかったのだろう。

以上、六点を列記してきたが、問題を掘り進めようとする入口で問題の全体の輪郭がみえてしまった感があるが、そうみえたことを確認するためにも、順を追って北川透『あんかるわ』が一九六〇年代的情況に覆われていく影を追って行かなくてはならない。

次にやってくる松下と北川の出会い、松下の論文「情況への発言（あるいは）遠い夢」の『あんかるわ No.18』（1968・4）への掲載を通じてであり、この論文の註記にそのいきさつが記されているが、その〈全〉文を書き写してみる。

○ この論文は一九六七年十一月下旬にかきはじめ、十二月末までに私の勤務先である神戸大学の雑誌「展望」に発表される予定であったが、羽田闘争と遠い夢のようにかわりあういろいろな事情のために編集部や他の執筆者の方針が混乱し、予定通りの期日、内容による発行が不可能になってしまった。これを知った北川透氏の熱心なすすめにより「あんかるわ」に転載しようと決意したけれども、その決意にへ～をつけておく責任も感じるので、ここに註をつけておきたい。

○ はじめの予想では、一九六七年に「展望」に発表され、そのあとで第三の〈羽田闘争〉と称される佐世保の闘争がやってくるはずであったのに、時間のくいちがいを思い知らされた。もちろん私は、第三だけでなく第四、第五、第六……第n番目の〈羽田闘争〉がやってこようとも、ここにかいている方向（矛盾や未熟さは別として）を



変更しないだろうが、この時間のくいちがいから、原稿の位相と活字の位相のズレがみえてきたことは事実である。

○ このズレは同時に、私が、六甲空間の枠内で読者を想定していたことを別の眼でみなおす契機を与えてくれた。私は〈国家〉公務員ではあるけれども、それを最大限に逆用しうる場としてのみ私の職業をとらえている。表面上、私は最も無能で、あいまいな教師として評価されているだろうが、ほんとうの姿は、この論文からかいまみてもらう他ない。

○ それにしても、私が北川氏の好意によってにせよ「あんかるわ」に転載してもらうことは、人のフンドシですもうをとる苦痛を与える。「試行」に寄稿していることについてと同じである。これらの自立誌が存在しない情況で、私が一個の無力な大衆として何かをかくとすれば、発表の機会はもっと縮小され、何かをかく気迫も減ったことであろう。だから私は〈北川〉氏の好意に感謝しながらも、そのとき感じる苦痛を失わずにいたい。

○ この論文を一応かき終ってから「あんかるわ」へ送るまでの期間にうまれた、いくつかの問題を私への暗示として上げておくと……

a この論文が、何かの遠い夢であるとすれば、その反世界性や、叙述の屈折（全体の構成についても、個々のことばについても）がどこからくるのか。

b 対応的な発想が、ある力によって閉じられた枠内での模索（それ自体は否定されるべきでなく、むしろ応用されねばならないと私は考えるが）であることを対象化したい。

c 記号へは、一個もつかいたくなかったのだが、同時につけられるものなら、全ての〈ことば〉につけてみたかった。この排反的なジグザグ・デモは、どこへ行きつくか。

d ……

このような分らなさをかかえこんだまま、いま私はこの論文を〈この論文〉のむこう側へさしだす。

松下の勤務先である神戸大学の雑誌に発表予定であった論文が、『あんかるわ』に転載されるということは、単なる掲載不可能性による肩代わりを超えて、〈論文〉の掲載不可能性の問題まで『あんかるわ』に〈転載〉されていくことになったことを意味していた。それは、「第n番目の〈羽田闘争〉」として〈大学闘争〉が起ったとしても、同位相で〈大学闘争〉についての〈論文〉をかいて、『あんかるわ』に転載されていくことがありうる、と示唆されていたようにみえる。本文の最（後）は、次のような〈ささやき〉からはじまっていくことが予感されている。

私にとって自然な位相で羽田闘争をうけとめようとしながら、はじめの意図よりもずい分遠くまできてしまったようだ。それは私の恣意からというより、羽田闘争と私の位相が強制したのだ。

さまざまなことば、とくに〈遠い夢〉ということばを用いることは、羽田闘争と私の関係において不可欠の条件ではない。それは、〈羽田〉闘争にヘルメットや角材を用いることが不可欠の条件ではないのに似ている。しかし、そのことばや装備を用いないにせよ、それらを生みだす根源への突入は一瞬も中断されてはならない。乱用されている〈遠い夢〉を相乗化していこう。

私たちが〈羽田〉闘争にかかわるときと、遠くで一瞬の呼吸のような〈未完了の完了〉につきうごかされるときを結合し対等に岐立せしめよ。そのとき相互の関係は支え合い逆転の運動を開始するのである。このささやきが正しいという保証はない。これ以外のやり方も無限にありうる。だからこそ、私は、この〈ささやき〉をとらえる。

〈羽田闘争〉は、この方向から総括すれば、全く未踏の状況を切り開く条件と、表層的な現実過程へ収束していく条件の双方をもっている。うまれている可能性と、応用されている可能性の落差を最大に弯曲させている力が〈どこかに〉あるにちがいない。

いま、ふと気付いたのだが、この〈総括〉は、私の〈闘争〉としての叙述にも、〈遠い夢〉の軸を媒介にしてあてはまる。このようにかいてきたことが一つの原因なのだ。しかし、この〈原罪〉を逆転して次のような試みが可能ではないか。

即ち、〈羽田闘争〉や〈私の表現〉と共通の限界をもつ、さまざまな〈情況〉を、潜在する全ての時間Ⅱ空間から発見し、いや創りだしていくこと。そして〈へ〉が占拠する領域を、可能な限り〈遠い夢〉へ拡大していく、この〈世界〉を〈占拠〉すること。この進みかたを阻止する力と持続的に対決すること。そのとき、あるいは無数の〈へ〉における共通の限界ものりこえられるのではないか。誤りを怖れずにいえば、この方向が私の意図や共有の場へもたらすべき目標から弯曲しているとしても、その弯曲した領域の極限に私の本当の〈敵〉（共同性や非共同性の問題を含めて）と対決する戦場が、そして〈遠い夢〉のようにこちらの模索する手と対応して〈敵〉を包囲する〈手〉がみえてくるのである。

いつ、どこで、どのようにして戦闘を開始するのか―それをきめるのは〈私〉であり、それを要求しているのは〈へ〉の声である。この声が、そのままのかたちで〈私〉に理解されないとしても、それを自明の条件として私は更に歩き続けなければならない。

「〈羽田闘争〉や〈私の表現〉と共通の限界をもつ、さまざまな〈情況〉を、潜在する全ての時間Ⅱ空間から発見し、いや創りだしていくこと。そして〈へ〉が占拠する領域

を、可能な限り〈遠い夢〉へ拡大していき、この〈世界〉を〈占拠〉すること。この進みかたを阻止する力と持続的に対決すること。」その戦闘の開始が〈発言への情況〉として迫りつつあるのを感じながら、「原稿の位相と活字の位相」の「ズレは同時に、私が、六甲空間の枠内で読者を想定していたことを別の眼でみなおす契機を与えてくれた。」が、これは当初発表予定であった神戸大学の雑誌から、学外の不特定多数の読者を前提とする『あんかるわ』に拡大したということを平面的に意味するよりも、〈六甲空間〉が『あんかるわ』のような雑誌と読者にまで拡大していきつつある幻想過程の本質的な広がりを感じていた。

『試行』への寄稿や『あんかるわ』への転載に、松下が「人のフンドシですもうをとる苦痛」を感じ、「北川」氏の好意に感謝しながらも、そのとき感じる苦痛を失わずにいたい」と思っていたとしても、そのような「北川」氏の好意」にどのように報いられよいか、ということもたえず彼の脳裡を駆けめぐっていたはずである。それはもちろん、『試行』に掲載されてきた「六甲」、「包囲」等の作品や、今回『あんかるわ』に転載されている論文で追求されているテーマヴィジョンが、現実的な関係の中で展開され、その闘争過程で表現されていくであろう〈作品〉や〈論文〉が『試行』や『あんかるわ』の誌面に〈掲載〉されていく——松下の言いかたでは、「へ」が占拠する領域」としていく——ことによって果たされる、ということであつただろう。『試行』や『あんかるわ』に〈私の表現〉が掲載されていく意味を問いつづけることは、『試行』や『あんかるわ』にとって〈私の表現〉を掲載する意味を問いつづけることでもあつたからだ。

松下が一九六七年の十・八羽田闘争に触発されてこの論文を書いた一年後に、その掲載を拒否した学内メディアの足下の神戸大学で、学生寮の問題をめぐる大学当局との大衆団交の決裂から、各学部の学生大会でストライキが決議され、先の論文で示唆されていた戦闘開始の声が「へ」から要求されつつある情況の中で、〈私〉の参加の決断が迫られていた。その〈私〉の決断は一九六九年二月二日に、「旧大学秩序の維持に役立つ一切の労働（授業、しけん等）を放棄する」ことを宣言した〈情況への発言〉が教養部掲示板に発表されるかたちをとって、誰の目にも明らかとなった。その一週間後に教養部A棟にバリケードが出現し、全構内に拡大していくが、『あんかるわ』に転載された一年前の〈情況への発言〉は、「〈あるいは〉遠い夢」であつた。この論文は冒頭からこう切り出されている。

私にとって〈羽田闘争〉は遠い夢に似ている。その原因の一つは、私が〈参加しない〉固有の事件としてのヴィジョンが、国家権力、マスコミ、さまざまな位相にある政治組織によって引き裂かれた評価を与えられ、余剰のみが屈折しながら私を訪れ、時間と共に変質していることにある。けれどもそれだけが私に遠い夢だと思わせる原因ではない。

どのような事件も情況に深く突きささるほど、全過程が視えなくなるようにしか存在しないのではないか。この疑問は、全ての判断自体にとって同じ意味をもつ情況などは存在しないのだ、という直感と反響しあう。むしろ私は、一見〈羽田闘争〉を遠い夢としてもとらえないまま生き続ける膨大な人々のように、沈黙したまま、しかも、それらの人々から遠いところで闘争の深さと、沈黙総体の深さが対等に岐立するような支点をみつけたすべきなのだ。

松下にとって自分が「〈参加しない〉固有の事件」であることによって、「〈羽田闘争〉は遠い夢に似ている」が、しかし、どのような事件に参加したとしても、「全過程が視えなくなるようにしか存在し」えないことによって、「遠い夢」にますます直面していくようになることが、はつきりと見据えられている。とはいえ、自分が〈参加しない〉事件としての〈羽田闘争〉はその一年後に、松下が所属する大学でストライキが決議されて、全学バリケードが構築されつつある情況の中での足下の〈羽田闘争〉として到来することによって、松下のみならず大学の全構成員が自分の意志を越えて、〈参加させられてしまっている〉事態に向き合わざるをえなくなった。一年前の十・八〈羽田闘争〉が〈参加する〉ことによって起こりうる闘争であつたなら、〈大学闘争〉は闘争への参加の意志以前に、〈大学〉に参加させられている関係によって、〈大学〉で生起した闘争にも否応なしに参加させられてしまっている構造になっていた。

人は生存するためには、どこかに所属せざるをえない。参加し、参加させられていく関係に生誕時から立たされている。意志決定による参加以前に、すでに人は自らの意志決定以前の参加の中に放り込まれてしまっていることを、〈大学闘争〉は照射していた。

〈遠い夢〉は自分が闘争に参加するか、参加しないか、を決定する以前の段階ですでに訪れつつある闘争を深く包みこんでいた。もちろん、自分が参加する意志をもたない闘争に対して自分の意志は拒否することができるが、しかし、その拒否の意志自体がすでに〈参加させられてしまっている〉関係く構造に対する表明でしかなく、〈参加させられてしまっている〉関係く構造そのものを意志は拒否できないことを物語っていた。

自らの所属する〈大学〉で起こった闘争に対して、参加を表明したり、不参加を表明したりすることはできる。だが、闘争が起こっている〈大学〉に自分が〈参加させられてしまっている〉関係く構造に対しては、誰も不参加を表明することはできない。闘争というものは、自分が〈参加させられてしまっている〉関係く構造に立つて闘うことではなく、その関係く構造そのものに立ち向かうことではないのか、と問うていたのが、自分が参加するしないにかかわらず、すでに〈参加させられてしまっている〉関係く構造を深く自覚している六九年二月二日の〈情況への発言〉であつた。